様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　１ 日現在

機関番号：１１６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２２４８

研究課題名（和文）清末プロテスタント宣教師の中西文化論に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic Research on the Discussion about Chinese and Western Culture by Protestant Missionaries in the Late Qing

研究代表者
手代木　有児（Teshirogi, Yuji）

福島大学・経済経営学類・教授

研究者番号：２０２０７４６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：　清末から民国初において知識人全般に見られる中西国民性比較における中国人への否定的評価、西洋人への肯定的評価がいかに形成されたのか、1870年代半ばから日清戦争前後までの宣教師の言説との関係はいかなるものだったのか、という問題を検討した。具体的には、ヤング・アレン、エルンスト・ファーバーら代表的宣教師の主要な中国国民性批判を整理・分析し、1870年代半ばから日清戦争前後までの鍾天緯、鄭観応、梁啓超らの自己(中国)認識形成にそれが強く影響したことを宣教師と知識人の著作の比較検討により実証的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来、清末中国に宣教師経由の西洋情報の蓄積があったことは知られていたが、その知識人への影響は、ティモシー・リチャードやアーサー・スミスの言説の影響が注目されてきた程度で、宣教師の著作を研究の史料とすること自体まれだった。1980年代以降、上海を中心に宣教師研究が成果挙げているが、他方その成果が十分に受入れられない状況も存在する。それは清末知識人が複雑な民族心理ゆえに宣教師の影響に言及しなかったことと深く関わっている。本研究はそうした歪んだ研究状況を打破し、また中国近代の自己認識への理解を大きく前進させた点で、学術的意義をもつものといえる。

研究成果の概要（英文）：　In the late Qing and the early Republican China, intellectuals generally compared the national characteristic of China to that of Western countries and evaluated Chinese negatively and Western positively. This thesis deals with the questions of how the valuation was formed and what its relationship was to the missionaries' discourse from the middle of 1870s until around the First Sino-Japanese War. Specifically, this thesis organizes and analyzes important criticisms on the Chinese national characteristic made by well-known missionaries such as Young John Allen and Ernst Faber and proves that they considerably influenced the formation of the self-recognition of contemporary Chinese intellectuals such as Zhong Tianwei, Zheng Guanying, and Liang Qichao by comparing and examining works written by the missionaries and the intellectuals.

研究分野：中国近代思想史

キーワード：清末中国　宣教師　知識人　西洋情報　中国認識（自己認識）　西欧受容　国民性批判　日清戦争

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中国文明中心の伝統的世界像が、西洋近代との遭遇によって維持できなくなったとき、中国人は自己(中国)への認識をどのように獲得していったのであろうか。これについては中国近代思想研究の根本的な問題でありながら、中国、日本、欧米いずれにおいても、踏み込んだ研究は見られなかった。清末中国人の自己認識は、アヘン戦争後の宣教師経由の西洋情報の流入、1860 年代半ば以降の西洋への使節団派遣、駐外外交使節派遣等により徐々に形成され、日清戦争敗北によって決定的となるが、この自己認識において注目すべきは、そこにある種のステレオタイプ化が見出せることである。1980 年代以降、中国では清末プロテスタント宣教師(以下、宣教師)の出版・教育活動への研究が進み（熊月之『西学東漸与晩清社会』1994 年、王立新『美国伝教士与晩清中国現代化』1997 年、王林『西学与変法』2004 年)、米国宣教師ヤング・アレンらが『万国公報』（1874－1907）において展開した、西洋と中国の全面的比較により中国改革の必要を説く議論(中西文化論)が、知識人に強い影響を与えたことが強調されるようになった（ただし知識人の変法論に即した十分な実証を伴うものではなく課題を残した)。またサイードの影響下に西洋人の中国認識の「文明」から「野蛮」への転換を克明に論じた周寧の大作『天朝遥遠』（2006 年）は、宣教師の中西文化論が、18 世紀啓蒙主義以来西洋中心の世界観の下で徐々に固定化された「野蛮」な中国人イメージの伝統を、忠実に反映したものだったことを指摘した。これらは、上記のステレオタイプ化を考える上できわめて重要な指摘であったが、宣教師の中西文化論についてはまだまとまった研究がなされていなかった。

２．研究の目的

本研究は、上述のような研究状況をふまえて、清末知識人のステレオタイプ化した自己認識の形成を検討するための準備作業として、まず知識人の自己認識形成に強い影響があったとされる宣教師の中西文化論が、そもそもいかなる内容を持っていたのかを明らかにしたうえで、清末知識人の中国改革論に見られる自己認識にそれがいかなる影響を与えたのかを実証的に研究しようとするものであった。

３．研究の方法

＜2017（H29）年度＞

1）三著作テキストの収集、精読及び専門家との研究交流

①アレン『中西関係略論』、フェーバー『自西徂東』、アレン『中東戦記本末』の未収集テキスト等を調査・収集し、また夏休みに上海で宣教師研究に造詣の深い旧知の専門家、上海社会科学院の熊月之氏、華東師範大学の易惠莉氏らとの研究交流を行った。

②2016 年度から始めていた三著作の精読を進め、精読がある程度進んだ段階からは、それと並行して知識人の変法論との対照を行い、知識人への影響にも目配りしつつ精読を進めた。

③このほか三著作以外の宣教師の中西文化論の収集・閲読を 2016 年度中から行った。

2）研究文献の収集・閲読及び関連情報の収集

①本研究関連の主要な研究として、アレンに関する Adrian A.Bennett, Missionary Journalist in China:Young J.Allen and his Magazines,1860-1883, 1983 をはじめ、梁元生、倉田明子、張碩、黄興濤らの研究成果を吸収した。

②また関連する研究情報を、上記の熊月之氏、易惠莉氏らとの研究交流のほか、国内の所属研究会メンバー、所属学会の中国近代思想史関係の研究者との間で行った。

＜2018（H30）年度（2 年目）＞

1）三著作の精読（継続）

2）研究文献の収集・閲読及び関連情報の収集（継続）

3）研究論文の作成・発表

史学研究会（京都大学文学部内）からの論文執筆の依頼を受けたことをふまえ、当初の研究計画を前倒しして、清末中国の自己認識の形成を知識人の文明観転換および宣教師の中西文化論の影響との関わりで考察した論文を作成した（手代木有児「清末中国の文明観転換と自己認識」『史林』第 102 巻第 1 号、2019 年 1 月)。

＜2019（H31）年度（3 年目）＞

1）研究文献の収集・閲読及び関連情報の収集（継続）

2）宣教師の中西文化論に関する資料の作成・発表

本研究で扱った宣教師の三著作のうちフェーバー『自西徂東』(２１万字)は、宣教師の中西文化論の代表作であるのみならず、中国の儒教経典からの引用による古の理想の治世の描写、清末社会の末端への詳細な観察、西洋近代の「文明」社会の詳細な紹介、そしてその背景たるキリスト教教義の紹介などにおいても注目すべき著作であることから、本研究の成果の一部としてこの内容の要約を作成・発表（未完）し研究者に広く紹介した（手代木有児「花之安著『自西徂東』ノート（1）(2)」『商学論集』、88 巻 3 号、2019 年 12 月、88 巻 4 号、2020 年 3 月)。

４．研究成果

本研究は、清末から民国初において知識人全般に見られる中西国民性比較におけるステレオタイプ化した中国人への否定的評価、西洋人への肯定的評価がいかに形成されたのか、 1870 年代半ばから日清戦争前後までの宣教師の言説との関係はいかなるものだったのか、という問題を検討した。具体的には、ヤング・アレン、エルンスト・ファーバーら代表的宣教師の主要な中国国民性批判を整理・分析し、1870 年代半ばから日清戦争前後までの鍾天緯、鄭観応、梁啓超ら知識人の自己(中国)認識の形成にそれが強く影響したことを、宣教師と知識人の著作の比較検討により実証的に明らかにした。
本研究によって、清末中国の自己認識に対する宣教師の影響が従来以上に明らかにされたことにより、今後この分野の研究の活性化が大いに期待できる。また本研究は、西洋近代が世界像の転換点において「文明」としての自己認識を形成する上で他者＝「野蛮」（オリエント、中国）を必要とした（サイード、周寧）のに対して、中国近代（少なくとも民国初期まで）においては、宣教師によってもたらされたその「野蛮」な中国認識によって、中国人の自己認識が強く方向づけられることになったことを明確に示した点で、中国近代の西洋受容に関する従来の研究を、少なからず前進させることができたと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 手代木有児	４．巻 88巻3号
２．論文標題 「花之安著『自西徂東』ノート（1）」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『商学論集』	６．最初と最後の頁 55-75頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 手代木有児	４．巻 88巻4号
２．論文標題 「花之安著『自西徂東』ノート（２）」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『商学論集』	６．最初と最後の頁 13-28頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三浦秀一ほか8名（共著）	４．巻 第71集
２．論文標題 学界展望（哲学）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『日本中国学会報』	６．最初と最後の頁 35－46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 手代木有児	４．巻 102巻1号
２．論文標題 「清末中国の文明観転換と自己認識」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『史林』（史学研究会、京都大学文学部）	６．最初と最後の頁 75-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 手代木有児	４．巻 －
２．論文標題 「中国人の国民性について－西洋文明との関係－（3）」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 政治プレス新聞社Webサイト(https://seijipress.jp)	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 手代木有児	４．巻 72巻4号
２．論文標題 （書評）「倉田明子『中国近代開港場とキリスト教』東京大学出版会、2014年」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『中国研究月報』（中国研究所）	６．最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 手代木有児	４．巻 －
２．論文標題 「中国人の国民性について－西洋文明との関係－(2)」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 政治プレス新聞社Webサイト（https://seijipress.jp/）	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考